



定禅寺ジャーナル入門



定禪寺ジャーナル
Jozenji Journal on the web ウェブ版



私のおススメ

定禅寺ジャーナル ウェブ版の3人が「定禅寺ジャーナル」ビギナーのキミにおススメの回を紹介！

鈴木 太 ディベート編 第九回「孤独」
(2011年10月4日配信)

太田一彦 ディベート編 第十二回「忘れる」
(2011年11月15日配信)

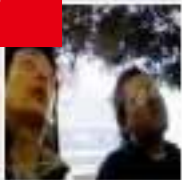
門脇 篤 まち歩き長町編 第一回「仙台長町～国宝級の場末感」
(2011年7月15日配信)



《インテル® Core™ i7-3960X プロセッサ Extreme Edition》搭載可能

ハイスペック構成で31,500円OFF
※30万円(税込)以上のカスタマイズ

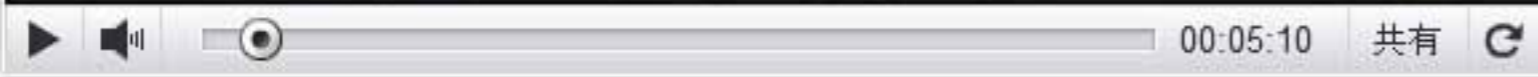
Endeavor史上最速のフラッグシップタワーPC: Endeavor Pro7500 **詳しい仕様は**



録画日時: 2011/10/04 18:02 JST

ディベート編 第九回 「孤独」

atsushikadowaki



Tweet 4 いいね! 2 +1 0 イネ!

まだ、評価されていません

ハイライト

番組情報 特別 埋込み 報告



録画日時: 2011/10/04 18:02 JST

ディベート編 第九回 「孤独」

atsushikadowaki



Tweet 4 いいね! 2 +1 0 イネ!

編集長からのオススメ

ディベート編第九回

「孤独」

鈴木太

皆さんは孤独というのはどういう状態だと思えますか？

家族がいて、友人がいて、社会とのつながりがあれば、孤独はあまり感じません。

以前、私は7ヶ月間ホームレスでした。

家族とも別れ、友人とも離れ、たった一人きりで路上で本を売り、夜は他のホームレスと地下道でごろ寝。それでも孤独を感じなかったのに、生活保護を受け、アパートへ入り、一人で寝始めた時、どうしようもない孤独感に襲われました。

それが私以外のホームレスはホームレスになったという事だけで孤独感を感じ、その事を今回のゲストホームレスの方が赤裸々に告白しています。

路上に今いる人からの意見をこうして音声だけでも放送するのはまれな事であり、また家族と同居していても孤

独を感じる人達には色々感じる事もあるでしょう。

この回は私が初めて司会としてインシアティブを取って番組を進めていた記念すべき回であり、司会などという大役を半分ズダボロになりながら担当し、ようやく自分の番組だと実感出来た——そんな思い出があります。

司会どころか、番組も初めて。以前なら苦手なものばかりだったのに、それにトライしようとするのは、苦手を作らず、限界を作らず、固定観念を持たずに生きて行きたい私を最も表した回だったと思います。

年末にやった「孤独II」もあります。が、まず「孤独」。これを見ずして「定禅寺ジャーナル」は語れない。私はそう思っています。

2012年2月29日



通りがかりのレギュラーがすすめる

ディベート編第十二回

「忘れる」

太田一彦

震災前の経緯

「わすれないためにセンター」での放送で、敢えて「忘れることの大事さ」に切り込んだ回。前に進むためには、一部を忘れることが必要。もちろん忘れないことの大事さもわかる。だから思い出せるように忘れる工夫も必要。本当に大事な記憶はなんなのか…冒頭の「本屋は総合外来」っていう発言も印象的でした。

もともと「ビッグイシュー」という本があることは知っていて、それを売っている姿を見つけて買いに行ってみたのが鈴木さんとの出会い。その後「SD」/「せんだいスクール・オブ・デザイン」という社会人+大学院生の向けの学校の課題で「仙台の書店を調査する」というのがあり、鈴木さんを取材したのが縁で親しく関わるようになりました。

震災後に「定禅寺ジャーナル ウェブ版」として動画配信が始まっているのを知って驚きつつ、放送にも参加。時々カメラ側のスタッフをやりつつ映像内にも登場しています。



まち歩き長町編 第一回

「長町く国宝級の場末感」

門脇 篤

「アメリカンドリーム」という言葉がある。では「ジャパニーズドリーム」があるとしたら、それはどんなものだろう。

——「故郷に錦を飾る」「立身出世」「庭付き二戸建て」「いつかはクラウン」

「アメリカンドリーム」の根幹をなすのは幸福を追求する権利、機会均等と自由競争の原理にある。誰もが機会を得て、自身の才能を可能な限り発揮し、豊かな生活を追及する権利があるとするその考え、感覚は、しかし額面通りに受け取る限りは、何もアメリカ

に限ったものではないだろう。どの国、どの地域の人間にとってもそれは取り立てて特異な価値でもなく、当然の真理であるだろう。

しかし同じ原理から出発して全く違った結論が導き出されることが往々にしてあるように、一時的な著しい経済成長期に居合わせた経験や、個人主義の伸展、グローバル化の進む状況の中にあって、それがよりわかりやすい結論へ、単純化された「価値」へと収縮していつてしまうのかもしれない。

仙台・長町で行われたこの回は、郊外化した日本という風景、単純な成功基準へのアンチテーゼとしての「長町」というまちの存在、価値、可能性にスポットを当てたものである。

長町は近年、「ザ・モール長町」「ラ

ラガーデン長町」など商業集積が進み、

長町駅東口にも市立病院の移転を含む、あすと長町の再開発が行われるなど、仙台における「ホット」なエリアである。その一方で、慶長17年（1612年）、伊達政宗により奥州街道の宿駅として拓かれ、山形・出羽街道とを結ぶ笹谷街道の分岐点でもあったという歴史をもつこのまちは、近代に入っからも交通の要衝であり、広大な貨車操車場（長町操車場）を配した長町駅は北日本最大の操車場であった。また、明治25年（1892年）、今の長町1丁目「フラワー通り」に開設された「長町青果市場」は、「仙台市民の台所」として昭和36年（1961年）まで広く県内外の青果物集散地としての役割を果たした。

現在でも市場があった頃の長町のにぎわい、市電や秋保電鉄のターミナルであった頃のこの町を知る人は多い。商店街を歩き、店主と二言三言も話をすればその頃の話が懐かしげに語られる。そしてそれは記憶としてだけでなく、まちの面影として現在も色濃く残っている。

こうした長町の仙台市中心市街地にはない「味」を、鈴木さんは「金では決して買うことのできないある意味国宝級の場末感」と呼ぶ。これは言い得

て妙である。

私はこの10年ほど、コミュニティ・アートという文脈で活動を行って来た。それはアートを作り手から解放し、それに興味がある人もない人も生きていく人すべてに解き放つ「機会均等」の試みでもある。アートの価値は本来、そうした革命性にこそある。それは既に当然のこととして意識されることもないこの世界の前提、コードを実践的に可視化し、問題として取り上げ、それを生きていく試みである（だから「アーティスト」とはミュージシャンのことでないのは当然として、職業でもなく、生き方のことだろう）。

そうしたコミュニティ・アートの実践の舞台のひとつが商店街である。そもそも私がまちでアートをやっていくようになったのも商店街で行われたアート・プロジェクトに参加したことがきっかけだった。そこではほとんど自分の価値観やルールは通用しない。私の説明する企画を5分間ほど熱心に聞いた後、「一言もわからない」と言った店主もいる。私にとってそうした存在は大いなる魅力である。

鈴木さん言うところの「場末感」は「多様性」と言い換えてもいいかもしれない。ソフトでセンスがよく、わか

りやすいものばかりが並び、同じような価値観を持った人や持つように強要された人ばかりからなる場所を「まち」と呼んでいいのだろうか。

逆に個性的でわかりにくく、混沌とした場所に人はそんなに行きたくないものだろうか。それは何か重要なものではないのか。

震災で甚大な被害を受けた地域が、新たなまちづくりを進める中で、相当がっかりしているという話を耳にする。生き残った自分たちで新しいまちをつくっていくという前向きな気持ち、希望を持って取り組む一方で、それをかたちにする具体的な作業に入る時、結局はありきたりなものや「専門家」がやりたいもの、「東京の人が好きそうなもの」に矮小化されてしまう挫折感「こんなはずじゃなかった」結局こうなってしまうのか」という空しさ、焦り。ものはピカピカで新しいのに、もうすでに手垢のついて薄汚れた何かに落ち着いていってしまい、しかしそれをどうすることもできないような気持ちにさせるあの回路はいつたいたいどんなドリームとつながっているのか。

地方の問題、日本の問題は震災によつて始まったものではない。それを

劇的に変える「革命」は起こせないかもしれない。しかし一方でもしかしたら今我々は革命前夜にいるのかもしれない。それを「革命」にするのか、どこかで見たような、結局こうなってしまうんだね的な動かしがたい無言の流れに黙って呼応していくのか。それを今考えるヒントが、長町から考えるこの回には含まれているように思う。

